

藤森亮一さん インタビュー

ご存知のとおり、若手チェリストの中でもめざましい活躍をされている藤森亮一さん。JCSの会員でもある藤森さんに、チェロを始めたきっかけから演奏活動のことまでお話を伺いました。インタビュアーはかねてより藤森さんのファンという同じくJCS会員の藤田正厚さんです。

藤田氏(以下、) 本日はお忙しいところ、ありがとうございます。熱烈なファンの一人ですので、いろいろ存じ上げていることも多いのですが、基本的な質問からさせていただきます。最初にチェロを始めたきっかけからお聞かせいただけますか？

藤森氏(以下F): 親父が中学の音楽の教師だったので、とりあえずピアノでもということに習わせたようです。記憶にないのですが、ピアノの前に座ると硬直して泣いてしまうような子供だったらしくて、これは音楽の才能はないと、最初はあきらめたようでした。でもピアノは嫌いでも音楽は好きで、小学4年か5年の時にパブロ・カザルスの伝記を読んで彼の生き方に感動したのが動機の一つですね。もうひとつは本当に不純な動機ですが、家にクラシックのLPがたくさんありまして、フルニエの小品集を聴いて、「これなら僕にもできる」と。

それでチェロを買ってもらったということですか？

F: 親は本当にやる気があるのか半信半疑だったようです。気持ちが1年、2年と持続したようなので、それじゃあ買って近所でレッスンでも、と始めたのは小学6年の時でした。

プロの演奏家になるんだと思ったのはいつ頃でしょうか？

F: 一応始めた時には、もうプロになるつもりではいたようです。記憶にはあまり残ってないんですが、小学校の卒業アルバムの寄せ書きに「チェリストになる」と書いてあったので…。

大学を卒業して、N響に入団したきっかけは？

F: オーケストラもアンサンブルも独りで弾くのも好きですが、ちょうど徳永兼一郎先生にN響に空席がひとつあると言われて、あまり考える間もなく二つ返事で「ハイ」という感じでした。留学したい気持ちも少し



あったのですが。

確か、N響に入られた後に留学されたことがありだったと…。

F: ええ、入団の時にその話をちょっとしたら、入ってからも行けたりすると。1990年から1年間です。

首席としての藤森さんの印象が強いのですが、どのような経緯だったのですか？

F: 徳永さん等、チェロのセクション自体が僕を推薦して、後押ししてくれたことが大きかったですね。

首席になった時のお気持ちは？チェロセクションをまとめるのは重荷と感ずることなどありましたか？

F: そうですね。やはり前の徳永さんの存在がすごく大きかったので、やはりそのプレッシャーはありました。まとめるといっても年も若かったので、人間的な部分もそうですし、演奏的にも年配の方のほうが色々知っていらっしゃいますから、最初は本当に大変でした。でも時間とともに少しずつ解決していきますね。どうやったらN響のサウンドがでてくるのかとか、自分が表に立って表現した方がいいのか、抑えた方がいいのか等、だんだんわかってきたような気がします。

先生でいらした徳永さんとは思い出もたくさんあると思いますが、特に強く印象に残っていることはありますか？

F: そうですね……レッスンではとにかくよく弾いて下さって、あまり多くを語らない。説明されてもわからない部分も多かったんですが、弾いてもらえるとすぐわかるという感じでした。レッスンでも、演奏会に行ったみたいに30分くらいずっと聴いていることもありました。

それとお茶をするのが非常に好きな先生で、N響に入ってからゲネプロと本番の間、喫茶店で仲間数人で何時

間も話をしたり。ほとんどくだらない話なんですけど。
(笑)

演奏活動

オケのほかにカルテットの活動をしていらっしゃるんですが、モルゴーア・カルテットはどのようなきっかけでこのメンバーになったのでしょうか？

F：ヴィオラの小野さんが僕をひっぱってくれたんですが、小野さんと（ヴァイオリンの）荒井さんがシヨスタコーヴィチを通じて共感した部分があったのが始まりで、それに引きずられるようにくっついて行ったんです。とにかくシヨスタコーヴィチをやりたいという二人の強い意思にひっぱられるように、なにがなんだか分からず始めて(笑)。僕自身としては、モルゴーア・カルテットの定期が始まった当初はシヨスタコーヴィチやカルテットをちゃんと認識していなかったのですが、回を重ねるうちにだんだんと面白くなってきましたね。

オーケストラ、室内楽以外にもソロ活動もこなされていますね。どの活動に一番力をそそがれていらっしゃいますか？

F：ウェイトというのは特にありません。ただ、一番楽しいのが室内楽、なかなか思うようにいかないのがオケ、総じていやなのがソロ活動ですね。オーケストラというのは全く自分の思い通りにならないと言ったら言いすぎですが、ほとんどは思い通りにならないことが多いです。自分が一生懸命さらったり、その曲について勉強したりしても、指揮者と解釈が違っていたり、他のプレイヤーと取り組み方に温度差があったりすることは当然あるわけです。数にすると100の演奏会のうち、99くらいあるかもしれませんが、がっかりすることもあります。それは程度も色々ありますから、「N響なんてやめてやるー！」(笑)というようなレベルではなくて、ちょこっと気がつくとかその程度のことなんですけど。ところが、残りの1回で本当に涙が出るようなすごい体験をさせてもらうんです。これはもう他の室内楽とかそういうのではありません。どうしてもオケでないと。合唱がはいっていることもあります。とにかくオーケストラにはそういう力があるんですよ。それは他の室内楽とかではもらえない。100回のうちの、この1回のためにオーケストラをやめられないんです。

それに対していつでも楽しめるという室内楽のほうは？

F：室内楽のほうは、いつでも楽しいです。モルゴーアの場合は、同じメンバーでやっている訳ですから、自分の言いたいことは、それこそ喧嘩になるくらいまで言い尽くしたうえで、お互い認め合ってやっています。音のやり取りで会話したり、一番楽しい部分ですよね。それはカルテットだけでなく、チェロアンサンブルでもそうですし、そういう意味で室内楽はやっていて楽しいで

す。ソロの場合は……やっぱり練習がキツいです(笑)。ソロだけやっていけば、それだけに専念できるかもしれませんが、室内楽、オケがあってその中で準備していくというのが大変で、それが嫌な部分ですね。

*

周知のとおり、奥様の向山佳絵子さんもチェリストでいらっしゃる訳ですが、ファンとしてはチェロの大物同士のご夫婦ということで興味のあるところ。どのような馴れ初めでいらしたのでしょうか。

F：初めて会ったのは、カザルスホールオープニングの時でした。彼女はまだ学生で、僕は記憶にないのですが、チェロのアンサンブルを隣りで弾いたようです。その後しばらくブランクがあったのですが、徳永さんの弟子の合宿と言うのを毎年白馬でやっていて、そこに先生が（向山さんを）ゲストで呼んでくださったんです。それに毎年来るようになって、それからですね。

お二人ともバッハの無伴奏CDをリリースされていますね。その違いなども楽しませて頂いているのですが、お互いの演奏を批評しあうということもあるのですか？

F：なるべくしないようにしています。喧嘩になりすから(笑)。わりと音楽的に共通する部分もあったりするのですが、基本的に全然違うということはもうお互いによくわかっているので、デュエットでも何も言わずにサッとやる方が良いことが最近分かりました。言い始めるとお互いに主張しすぎてしまうので。

バッハのシャコンヌをチェロ・カルテットでされて、その後ヤマハで向山さんとデュオされましたね。2人で弾いているのに、4人で弾いているようだとびっくりしました。

F：あれは4人用に書かれている楽譜を2人に振り分けたので、ちゃんと弾けさえすれば4人のようになるはずなんです。

そうでしたか。今度はそれをお独りで弾くということはどうですか？

F：いやー、それはまだないですね。

演奏中のハプニング

話は変わりますが、何かご趣味のようなものはあ



りますか。

F：あんまり長続きしないんですけど、とりあえずカラオケでしょうか。

意外ですね。どういう傾向の曲を歌われるんですか？

F：ジャンルを問わずなんでも。強いて言えば最近はずんずんサザンですが、ちょうどチェロを始めたころに音楽が好きだったので歌謡曲の番組とか結構見ていたんですよ。昭和40年代くらいの曲とか結構得意です。新御三家からピンクレディあたりまで。その頃からちょうどチェロの勉強が大変になってきたので、その後はあまり...

音楽の仕事がされていて、ご趣味も音楽というのは...

F：良くないですねえ。でも他に趣味といっても.....一時期、携帯電話にも凝って、新機種が出るたびにモニターのごとく買っていた時期もありましたけど。ゴルフも続かなかったし...

演奏の様子など拝見していて、見た目にはクールという印象を持っているのですが、以前テレビで、新しいホールでステージにエンドピンをグサッと刺すのが快感とおっしゃってましたね？

F：気持ちいいですねえ。(笑) あれを聞いてあぶない人だと思った方も多いようですが。

それと、2年くらい前のN響定期で弓が壊れたことがありましたね。たまたまチェロ・パートを見ていて気が付いたのですが、あんな事故はそんなにしょっちゅうあるものではないですよね？

F：ないですね。びっくりしました！ 弦が切れることはよくあるのですが、弓の毛が抜けたことにしばらく気が付かなくて、なにか弛んだなと思って張ったんですけど全然だめで、しばらくしてからバサッと落ちちゃった。落ちたはいいんですけど、この落ちた毛はどうしようかなとしばらく考えこんでしまっ。(笑)

確か隣は銅銀さんでしたね？

F：彼も自分の弓を渡したらいいのか、しばらく迷ったようで、そういうアタフタした時間があったと思うんです。あの時は慌てましたね。どうしていいかしばらくわからなくて。

さすがに冷静な藤森さんも慌てることあるんで



すね。

今後のこと

私たちにとっては音楽的にも技術的にも完璧と思えるのですが、ご自身にとっての課題などはありますか？

F：みなさんよく言われることかもしれませんが、楽譜に忠実にということと、地味かもしれませんが誇張するような派手なものではなく、正統な演奏をしたいというのはあります。それとやり残している曲をできるだけたくさんやりたいというのは常に思っています。

やり残している曲というと？

F：すごく名曲なのに一度も弾いたことがないという曲もあるので、ここ10年くらいで勉強していきたいですね。

これからの演奏活動の抱負をお聞かせいただけますか？

F：カルテットは定期を年二回、メンバーが生きている限りはやっていく予定です。あと今年の11月か12月にはリサイタルをする予定です。さっき言ったように今までやっていない名曲をとりあげるつもりですが、実はシヨスタコーヴィチのカルテットはやっているんですが、ソナタは人前で弾いたことがないんです。もし希望のピアニストとスケジュールが合うようであれば、やってみたいですね。

藤森ファンとしては、バッハの無伴奏全曲を東京でぜひやっていただきたいなど。

F：おとし京都のアルティというホールでやったんですけど、全曲ってつらいですね。あとは、1月にラ・クアルティーナの四人のメンバーで新しいCDをレコーディングの予定です。録音次第ですが、春に発売できると思います。チェロ・カルテットは6月15日に奏楽堂で予定があります。

これからも素晴らしい演奏を楽しみにしております。お忙しいところありがとうございました！

<インタビューを終えて>

演奏会で拝見するお姿から、藤森さんはもしや非常に気難しい方ではないかと心配していましたが、それは大きな見当違いでした。実際にはとても気さくな方で、特に「高校時代などはかなりワルでした」などと番外でおっしゃっていたのには多少驚きましたが、ユーモアを解する幅広いセンスをお持ちの方とお見受けしました。この幅広さが、オケ・室内楽やソロ活動における、堅実にして流麗なすばらしい音楽を生み出しているのだと思います。インタビューをさせていただいたお蔭で、私自身、これまでも増して熱烈な藤森ファンになってしまいました。(藤田)

12月7日チェロサロン レポート



(R - 129) 鈴木 文弘

当日はいつものサントリーホールではなく、トリンスクエアに新しくできた第一生命ホールでのチェロサロンでした。いつもチェロサロンに行く日は期待と不安でそわそわしてしまいます。今日の主宰、藤森さんは、奥様の向山佳絵子さん共々ずいぶん前からあこがれの存在でしたので、どんな会になるのかとても楽しみにしていました。

さて、会場に着くと正面に藤森さんが涼やかに立っておられ、ていねいに「はじめまして、藤森です。よろしくおねがいします。」と先にあいさつされてしまいました。いつもの面々はもうスタンバイ状態ですので、私もいそいでケースを開けてみると……やや、D線が弦巻きからはずれている!あせって、ねじれて癖のついた弦をベグに差し込もうと格闘していると、それを見ていた藤森さんが「どうしました、わたしがやりましょうか。これはちょっとやっかいだな、なんでしたらスペアの弦を差し上げますよ。メーカーはどこです?」と、立て続けにおっしゃり、私ももたもたしているうちに手際良く糸巻きにリセットしてしまいました。汗顔、恐縮、感激です。

すこし遅れて手ぶらでやって来た人に対しては、「いかがですか、楽器ならここにありますがどうぞ。」と、冗談なのか本気なのか、ご自分の楽器を(!)差し出すではありませんか。(もちろん辞退されましたが、ずうずうしい私だったら「ああ、どうも。とか何とか言って借りちゃったりして…)

こんな風に、わたしは最初からそのさげない中にもユーモラスで親切な物腰に圧倒されてしまいました。

チューニングを終え、すでにスタッフのかたがセッティングしてくださったのでしょうか、扇型に並べた譜面台の上には今日のアンサンプルの課題曲、ハイドンのディベルティメントA-durの楽譜が載っています。下手から順番に1st・2nd・3rdの3パートです。わたしはとりあえず2ndあたりのポジションに座って譜読みをすることにしました。すると、今日の会場の世話人で協会会員でもある三木さんが自分の座っている1stの場所に来いと急かすのです。

周りを見回すといつものサロンの幹事役、石島さんはすでに内声の位置に陣取り、末松さん、田中さん達ご常連もそれぞれしっかりと自分のポジションを確保しています。『また今日の曲も初見だし、1stはハイポジションが出てくるからいやだなあ、でも

しょうがないか、今日は入内島さんが来ていないし……』(注:入内島さんはたいてい1stに座ってくださるのです。)などと不安が募りますが、とにかく三木さんの隣に移動しました。

と、こんな雰囲気、今日はいつもの技術的な基本に関する質疑応答からではなく、課題曲の合奏からのスタートとなりました。まず第1楽章をざっと通しました。初見の人も多く、なんとか終わりまで止まらずにいっただけという感じです。「まあいい感じですけど、なんとなく音楽が平板だとおもいませんか。もっとメリハリがあったほうがいいですね。」と、藤森さんのアドバイスが始まりました。「フレーズ・楽想の切れ目で雰囲気を変えて。」「ハーモニーの変化に気づいて。」「他のパートをよく見て、聴き合って。」短いセンテンスでごく一般的なことを指摘されているだけに、その言い方、そのタイミングによって驚くように音楽が豊かに変化していくのです。

それぞれのパートを藤森さん自ら弾いてみせて下さるときは、みんなの視線が凝集する感じになります。

「トニカドドミナントの5度音程だけは外さないように、あとの細かい音はちょっといいかげんでも構いません。皆で合わせればちゃんと音楽として聞こえるんですよ。」といったアンサンプルについての実践的アドバイスもいただきました。こういうことがわれわれアマチュアのチェリストにとっては本当に大事なことです。譜読みで細かいパッセージが目に入るとすぐに頭に血が上り、テンポやフレーズがオカしくなってしまうといった経験は誰にでもあるもの。そんなときに、このひとことを思い出して自分に歯止めをかけられるようになりたいと思いました。

さて、互いのパートを交代したりしながら、ともかく課題のハイドンが終わりました。すると実にいいタイミングで(いつもそうなのですが)田中さんが四声合唱のクリスマスキャロルの譜面をみんなで遊びましょと提案してくれました。これがいつものサロンでいちばん楽しいひとときなのです。聖夜を始めとする聴きなれた(断じて弾きなれたではない!)曲を合わせることになりました。

曲ごとにパートを交代しながら、時節柄クリスマス気分楽しく合奏していると、藤森さんは主宰の席を離れ、いつものまにかみんなのパートのうしろを移動しながらうつくしい音色で応援してくださいました。ブルース・リーの映画ではありませんが、すぐそばで名人に弾いてもらおうと自分も上手に弾けたような気になるものです。

こうして幸せな気分の中に、あっという間に時間となりました。おわりに、藤森さんから皆にプレゼントがあるとお知らせがありました。なんと、N響の若手の名手4人によるチェロクアルテットのCDをプレゼントして下さるというのです。本当に何という気前の良さでしょうか。私達は皆それぞれ、ちゃっかりとCDジャケットにサインまでいただいて今日の会は幕となりました。

あとで、いただいたCDを聴いてみると、アンサンプルが個人の妙技の集合ではなく、個々の曲そのものが要求する表現を4人で無理なく音にしてゆくといった姿勢が感じられ、それがサロンでの藤森さんの自然体でのアプローチと同じなのだ、だからこのプレゼントも実はレッスンの続きだったのだということに気がきました。

藤森さん、そして協会スタッフのみなさん、こんな素晴らしい会を本当にありがとうございました。

ペンのおもむくままに ～ 鵜沼の思い出

倉田 澄子

「クラチン、元気？ 今度“リレー・エッセイ”の番だからよろしく！」と岩崎洗ちゃんから、パトタッチしたこの原稿、ついに締め切りギリギリになって真っ青になり、ペンを取っている…。

思えば、洗ちゃん、安田さんとチェロ・トリオをやって、私が昔住んでいた純日本風の家の畳の上で斎藤秀雄先生のレッスンを受けていたのは、私達3人がまだ中学生の時でした。わざわざ東京から鵜沼まで出向いて下さった斎藤先生は、クレンゲルの美しい三重奏を大変細かく、真剣に教えてくださいました。当時、一緒に住んでいた私の祖父が、その時のレッスン風景を写真に納めてくれたので、45年たってもいまだに、あの日洗ちゃんが新しい中学のブカブカの学生服に埋もれて弾いていた姿や、女の子みたいに可愛かった安田君、そして小学校の時から今くらい大きかった私……を懐かしく思い出しています。そうそう、その日はレッスンの後、洗ちゃんのお姉さんの淑さんや、近くに住んでいた安田君のお母様、そして片瀬にいらした天才美少年の堤剛さん（現チェロ協会会長さん!!）達と一緒に楽しくゲームをしたり、近くの浜辺に行ったりもしました。斎藤先生は、ゲームになるとすっかり童心に帰って、私達と一緒に大騒ぎ！「座布団取りゲーム」をした時などは、和服を着てすましていた私の母と最後の一枚を取り合いになり……気が付いた時には、あのスリムな斎藤先生の膝の上に、“ドスン！”と一瞬遅れた母が乗っかってしまい、みんな大笑いと言うこともありました。

あのような偉い先生があんな無邪気になれるって本当に素敵だと思いました。

あれから、45年の歳月が流れたとはとても信じられませんが、それぞれの道を歩んで皆さん立派になられ、世界中で活躍を続けていらっしゃる事を、斎藤先生は天国でどんなにか喜んでいらっしゃるでしょう。

私も気がついたら、生徒たちと遊ぶのが大好きな先生になっていました…。

チェロ協会の皆様へ

工藤すみれ

昨年9月11日の大惨事の後、一時郵便物や交通手段が不便になりましたが、私はニューヨークのジュリアード音楽院で勉強を続けています。2001年の9月から、私はアヴァロン・ストリング・クアルテットのチェリストとして、ジュリアードのレジデンス・クアルテットでジュリアード・クアルテットに師事しています。このアヴァロン・クアルテットは約6年前に結成され、今年、私が新しいチェリストとして入団しました。学校ではアカデミックの授業はありませんが、毎週2回、ジュリアード・クアルテットの指導を受けています。この1学期はファースト・ヴァイオリンのスマイルノフ教授とセカンド・ヴァイオリンのコープス教授が担当でした。その他、レジデンス・クアルテットの義務として大学1年生のクアルテットのクラスで、J S Qのアシスタントとして毎週月曜日に教えています。

これは、プロのクアルテットとしてこれからのキャリアに役立てるためという目的があります。その他、昨年

はモーストリー・モーツァルト・フェスティバルや、ミネソタ・パブリック・ラジオへの出演など、演奏活動も全米で行いました。今年の大きな予定としては、2月にはカナダのミュージック・トロント・シリーズでカナダデビュー、4月にはニューヨークのアリス・タリー・ホールでリサイタル、夏はイタリア・ツアーがあります。

日本では、私のソロで、5月31日の読売名曲シリーズでハイドンのC-dur、6月11日は、オペラシティの小ホールでリサイタルの予定です。

いつの日か、私たちアヴァロン・クアルテットの演奏を日本の皆様に聴いていただけるのを願っています。2002年がチェロ協会の皆様にとって、すばらしい1年になりますよう、お祈りいたしております。



情報コーナー

○「第5回全日本ビバホールチェロコンクール」

一次予選：7月17日(水)・18日(木)
二次予選：7月19日(金)
本選：7月21日(日)
申し込み期間：4月1日～4月30日(当日消印有効)
会場：養父町ビバホール
参加資格：国籍を問わず、15歳以上35歳以下の者。(2002年4月2日現在の満年齢)
お問合せ・申し込み先：養父町公民館・ビバホール
0796-64-1141
ホームページ：<http://www.fureai-net.tv/yabucho-ko/>
協会事務局にちらしがあります。ご希望の方にはFAXいたします。

○宇野哲之 チェロ・リサイタル

4月5日(金) 19:00開演 四谷区民ホール
出演：金井玲子(Pf)
入場料：自由席 3,500円
お問合せ：03-3771-2029(宇野)

○読売日本交響楽団 第83回名曲シリーズ

4月12日(金) 19:00開演 東京芸術劇場
出演：ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー(Cd)、毛利伯郎(Vc)
曲目：プロコフィエフ チェロ協奏曲第2番「交響的協奏曲」、他
入場料：A 8,000円、B 7,000円、C 5,000円、G 2,000円

○サントリーホール ニューアーティスト・シリーズ

「ダニエル・リー チェロ・リサイタル」
4月18日(木) 19:00開演 サントリーホール(小ホール)
入場料：自由席3,000円、学生席1,000円
お問合せ：サントリーホールチケットセンター 03-3584-9999

○「VIVA! チェンバー・オーケストラ」

4月25日(木) 19:00開演 トッパンホール
出演：藤岡幸夫(Cd)、ルイジ・ピオヴァーノ(Vc)
曲目：ボッケリーニ チェロ協奏曲 二長調 G.479、他
入場料：全席指定5,000円、学生2,000円
お問合せ：トッパンホールチケットセンター 03-5840-2222
上記チケットセンターで予約の際に、チェロ協会会員である旨をお申し出いただくと、この公演に限り10%Offのご優待が受けられます。

○東京都交響楽団 第548回定期演奏会

4月25日(木) 19:00開演 サントリーホール
出演：クイリン・ヴィルゼン(Vc)、他
曲目：ラロ チェロ協奏曲 二短調、他
入場料：S 6,000円、A 5,000円、B 4,000円、C 3,000円
お問合せ：都響ガイド 03-3822-0727

○「鳥の歌 ～徳永兼一郎メモリアル～」

5月1日(水) 19:00開演 カザルスホール
出演：向山佳絵子、原田禎夫、山崎伸子、藤森亮一、他
入場料：全席指定 4,000円
お問合せ：カザルスホールチケットセンター 03-3291-2525

○デュオ ハヤシとイタリアの仲間たちPartIX

「オリオン ピアノクワルテット」
5月16日(木) 19:00開演 ザ・フェニックスホール(大阪)
5月20日(月) 19:15開演 第一生命ホール(東京)
出演：林俊昭(Vc)、林由香子(Pf)、ヤン・ヴァン・ワイエンベルグ(Vn)、ファブリツィオ・メルリーニ(Va)
入場料：自由席 5,000円
お問合せ：ザ・フェニックスホール 06-6363-7999(大阪)
トリオン・アーツ・ネットワーク 03-3532-5702(東京)

「斎藤建寛 リサイタルシリーズ vol. 4」
5月27日(月) 19:00開演 ザ・フェニックスホール(大阪)
出演：富岡順子(Pf)

入場料：自由席 4,000円
お問合せ：ザ・フェニックスホール 06-6363-7999

○「向山佳絵子と仲間たち」

5月29日(水)・30日(木) 各日19:00開演 JTホール
出演：菊地知也、藤森亮一、山本祐ノ介、植木昭雄、他
入場料：全指定席 3,000円
お問合せ：JTホール 03-5572-4945

○「チェロ・アンサンブル・サイトウ」

5月31日(金) 19:00開演 サントリーホール
入場料：S 6,000円、A 5,000円、B 4,000円、C 3,000円
お問合せ：カジモト・イープラス 03-5749-9960

○フェスティバル・ソロイスツ with エマニュエル・アックス(Pf)

6月27日(木) 19:00開演 サントリーホール
出演：堤剛(Vc)、竹澤恭子(Vn)、豊嶋泰嗣(Va)
入場料：S 5,000円、A 4,000円、B 3,000円、学生1,000円
お問合せ：サントリーホールチケットセンター 03-3584-9999

○「倉田澄子 チェロ・リサイタル」

6月19日(水) 19:00開演 東京文化会館 小ホール
出演：野平一郎(Pf)
入場料：自由席 5,000円、学生 4,000円
お問合せ：神原音楽事務所 03-3586-8771

○「ベルリンフィル12人のチェリストたち」

7月7日(日) 14:00開演 サントリーホール
入場料：S 8,000円、A 7,000円、B 6,000円、C 5,000円
お問合せ：ノア・チケット 03-5386-9999

○「東京都交響楽団 第556回定期演奏会」

10月28日(月) 19:00開演 サントリーホール
出演：小泉和裕(Cd)、田中雅弘(Vc)、他
曲目：ベートーヴェン「ヴァイオリン、チェロ、ピアノのための三重協奏曲 八長調」、他
入場料：S 6,000円、A 5,000円、B 4,000円、C 3,000円
お問合せ：都響ガイド 03-3822-0727

お知らせ

ご好評におこたえて、
第2回サマーキャンプを行います！
6月1日(土)～2日(日)の2日間、
場所は前回と同じ山中湖、
ペンション・セロを予定しています。
詳細は追ってご連絡します。

編集後記

私事ですが、この春の異動でJCSの事務局を離れることとなりました。短い間でしたが、チェロ協会を通じてさまざまな経験をさせていただきました。4月からは、新担当にかわります。お世話になりました皆様、本当にありがとうございました。(高鳥)

日本チェロ協会会報(JCS NEWS)第14号

2002年3月31日発行

発行：日本チェロ協会

東京都港区赤坂1-13-1 サントリーホール内

電話 03-3505-1001 FAX 03-3505-1007

発行人：堤剛

編集：日本チェロ協会事務局

編集協力：リュウカンパニー